

## 2016年6月12日 礼拝メッセージ

聖書：マルコの福音書9章9～13節

説教：山を降りるイエス

### 1 山を降りながら語るイエス

一年に一度の野外礼拝です。昨年の野外礼拝では、イエスが三人の弟子たちを連れて山に登った場面を取り上げました。そこで今回はその続きとして、「山を降りる」イエスについて考えてまいります。

あらすじをふり返ります。イエスはペテロとヤコブとヨハネを連れて高い山に登りました。その山の上でイエスの御姿が変わり、非常に白く輝き、気がつくともーせとエリヤが現れて、イエスと語り合っていました。それが8節までの出来事でした。

9節を読みます。「さて、山を降りながら、イエスは彼らに、人の子が死人の中からよみがえるときまでは、いま見たことをだれにも話してはならない、と特に命じられた。」

このなかの「山を降りながら」ということばに注目していただきたい。聖書はむだなことばは一つも書かない。私たちの救いのために必要なことばだけを書いている。それが聖書です。ですから「山を降りながら」という何気ないひとことにも実は深い意味があるはずで、ではどんな意味があったのか、そのことを考えていきます。

### 2 弟子たち：救い主は死ぬはずがない

弟子たちは、イエスのことばに大変とまどい、いろいろ議論してから11節でこう質問します。「律法学者たちは、まずエリヤが来るはずだと言っていますが、それはなぜでしょう。」「それはなぜでしょう」と言っているのは、エリヤは何をするために来るので

しょうか、そのような意味です。

でも、なぜここで唐突なようにエリヤの名前が出るのでしょうか。理由があります。旧約の時代から、ユダヤ人はメシアが来られること熱心に待ち望んでいました。その救い主について、律法学者たちは教えていました。まず最初にエリヤがやって来て、救い主が通られる道をまっすぐにする。そうしてから救い主が来られる。それは旧約聖書に書かれていることで、そのとおりです。

ところが、そのエリヤをつい先ほど山の上で自分の目で見たのです。ということは、これから救い主の道がまっすぐにされていくということではないのか。道が備えられるのですから、救い主が死ぬはずはありません。けれども、イエスは、自分のことを「人の子」と言いながら、もうまもなく死ぬかのようなことを言っている。それで弟子たちはわからなくなってイエスに質問した。そういう事情です。

### 3 山に登り、そして降りるイエス

#### 1) エリヤとはだれか

イエスは答えました。「エリヤはもう来たのです。そして人々は、彼について書いてあるとおりに、好き勝手なことを彼にしたのです。」

このことばは少し説明が必要です。弟子たちは山の上で確かにエリヤを見たのですが、そのエリヤとイエスが言っている「エリヤはもう来たのです」と言うエリヤ、実は違う人を指しています。弟子たちが見たのは旧約聖

書に出て来るエリヤです。

いっぼうイエスが指しているエリヤは別の人です。では、いったいだれのことか。マタイの福音書 11 章 10 節に答えがあります。イエスはこうお語りになりました。「この人（洗礼者ヨハネ）こそ、『見よ、わたしは使いをあなたの前に遣わし、あなたの道を、あなたの前に備えさせよう。』と書かれているその人です。」つまり、洗礼者ヨハネこそが、救い主に先立ってくるエリヤであるとイエスは教えておられます。

## 2) エリヤは自分が死ぬことで主の道を備えた

ではその洗礼者ヨハネはどのようにして主の道を備えたのでしょうか。ヨハネの人生は、ひとことで言うことができます。彼はイエスに洗礼を受け、そしてヘロデ王に首を切られて死んだ。そんなヨハネですから、彼がどのようにして主の道を備えたのか、簡単にわかる。イエスに洗礼を受ける。それが主の道を備えることであつた。だって理由は明らかです。死んでしまったら何もできないから。そう思うのでしょうか。そうではない。もう一つ大切なことを彼はした。彼はヘロデに殺されました。実は、そのことこそが主の道を用意する大切な役割だったので。

そもそも主の道はどこに行く道でしたか。死に向かう道です。十字架で殺される道です。そのように考えると確かにヨハネは主の道を備えたこととなります。

## 3) 降りていく歩みの先にある恵み

今年のメッセージで、イエスが山に登ったのは、十字架の予行演習をするためであると言いました。もしそうであるなら、山から降

りることは何ですか。よみに下ること、死ぬことを指します。どうしてイエスは山を降りながら、ご自分の死とよみがえりを語るのか、それは決して偶然ではなかった。すべてのことに深い意味があつたのです。

イスラエル旅行に行かせていただいたとき、イエスが三人の弟子とともに登つたと考えられている山に行きました。見て驚きました。登山道は3歳の子どものでも登れるほどなだらかなのです。ところが頂に立つと目の前が垂直に切り立った崖でした。高さは数百メートルはある。それを見たとき思いました。イエスは、この崖よりももっと高い切り立ったところからよみの深みに落ちていった。それが十字架だつたのだ。

イエスは、天から私たちのところに降りてくださり、死の深みにまで降りて行かれました。

私たちはどうですか。降りていく人生を想像できるでしょうか。そんなことを考えたら悲しい気分になるだけ。だから目を向けようとしません。でも、主は降りていく人生の先に実は最もすばらしい恵みと祝福があるのだということを教えていただきました。

皆さんもこれから山を降りるとき、主が歩まれた道を思い起こして頂きたいと願います。